



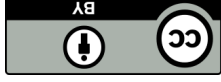
Storybooks Canada

storybookscanada.ca

シシベケトル

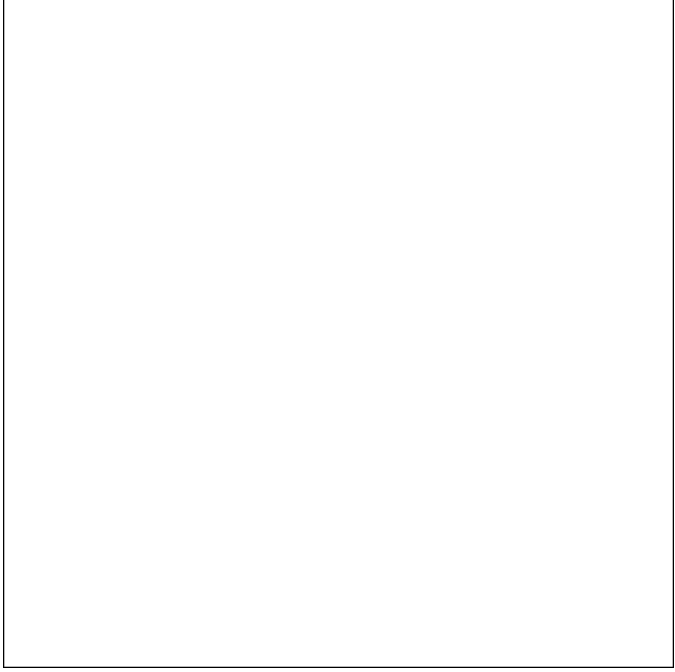
Written by: Rukia Nantale
Illustrated by: Benjamin Mitchley
Translated by: Ryoko Sakakibara

This story originates from the African Storybook (africanstorybook.org) and is brought to you by Storybooks Canada in an effort to provide children's stories in Canada's many languages.



This work is licensed under a Creative Commons [Attribution 3.0 International License](https://creativecommons.org/licenses/by/3.0).
<https://creativecommons.org/licenses/by/3.0>

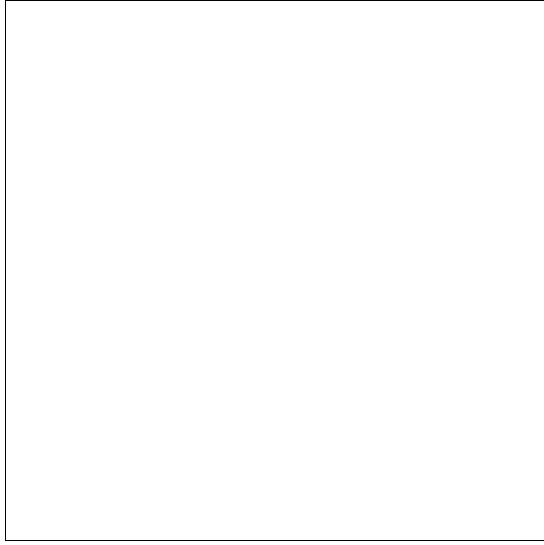
シシベケトル



✎ Rukia Nantale
👤 Benjamin Mitchley
📖 Ryoko Sakakibara
🗣️ Japanese
📖 Level 5

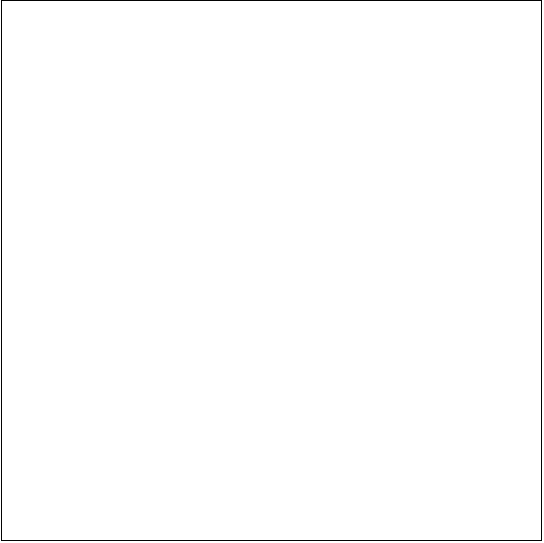
(imageless edition)

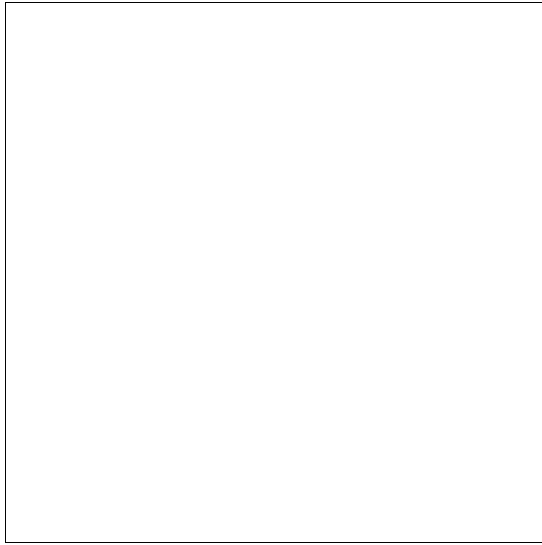




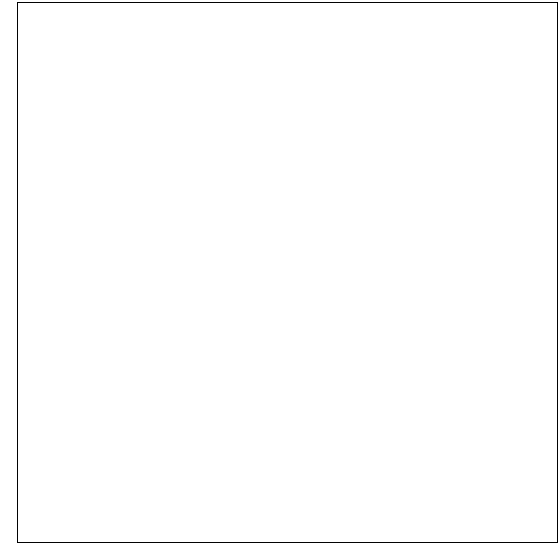
お母さんが死んでしまって、シンベグイレは、ほんとうに本当に悲しい気持ちでした。けれども、お父さんがシンベグイレのためにできる限りのことをしてくれたので、お母さんがいなくても、少しずつですが元気になれるようになりました。ふたりは、毎朝同じ椅子と一緒に座ってその日のことをはなし、夜には一緒にご飯をつくりました。そして、片付けが終わったら、お父さんがシンベグイレの宿題を手伝うのでした。

ある日のことでした。お父さんがいつもより遅く帰ってきました。「シンベグアイレ、どこにいる？」呼ばれてシンベグアイレがお父さんに駆けよっていきます。けれども、お父さんが知らない女の人の手を握っているのを見たたん、ぴたっと立ち止まってしまいました。「シンベグアイレに、特別な人を会わせたくて連れてきたんだ。アニータというんだよ」お父さんはにっこりほえみしました。



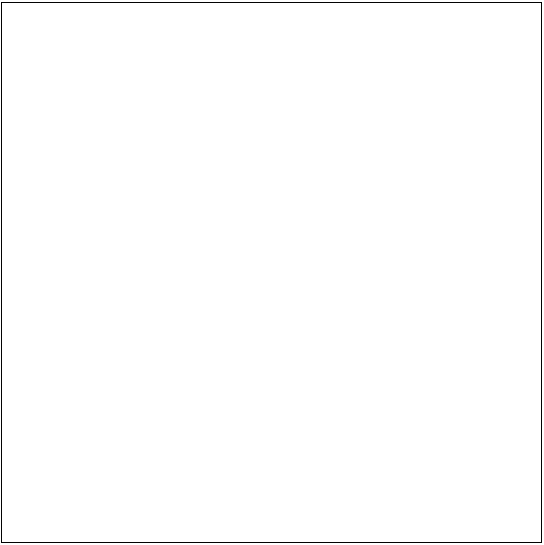


「はじめまして、シンベグイレ。お父さんからたくさんあなたのことを聞いているのよ」そう言ったものの、アニータは笑いもしなければ、シンベグイレの手を取ろうともしません。お父さんはというと、とても嬉しそうにウキウキしながら、これから3人で暮らしたらどんなに素敵な暮らしになるかを話しています。「ねえ、シンベグイレ、アニータをお母さんだと思ってくれたら嬉しいんだけどな」お父さんは言いました。

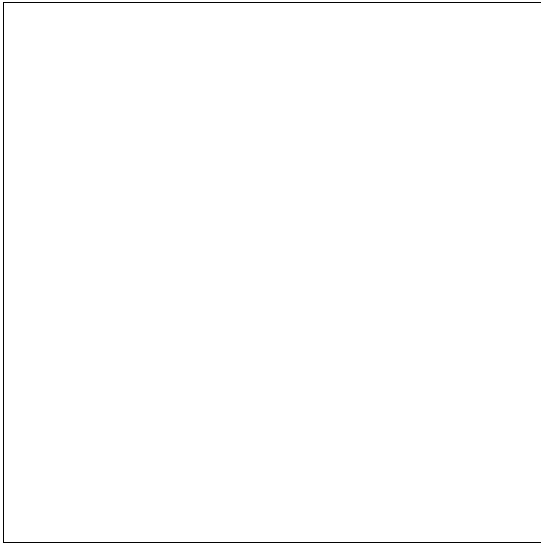


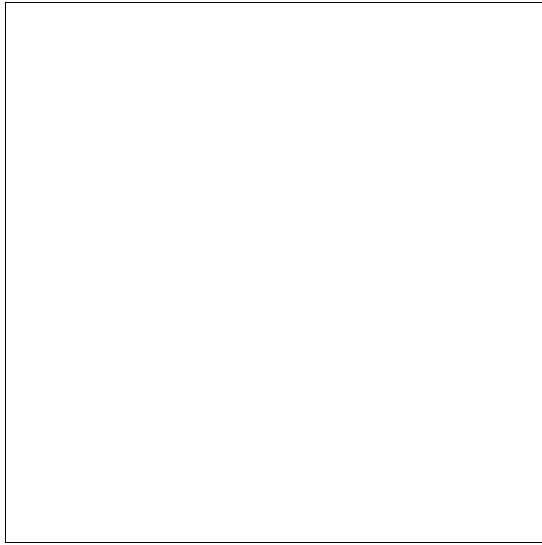
次の週、アニータはシンベグイレといとことおばさんを家に呼んで、ご飯をふるまいました。すごいごちそうです！アニータはシンベグイレの大好きなものをぜんぶ作っていて、みんなでおなかいっぱいになるまで食べました。食べ終わると、大人たちが話しているあいだ、子どもたちは一緒に遊びました。遊びながら、シンベグイレは本当にとっても嬉しくなって、勇気もわいてきました。だからこう決めたのです。「あと少し、あとほんの少ししたら、うちに帰って、お父さんと新しいお母さんと一緒に暮らそう」。

シンベグイルの暮らしは、すっかり変わってしまいました。お父さんと朝一緒に同じ椅子に座る時間はありません。アニータが、シンベグイルに家のお手伝いをたくさん言いつけるのです。あんまりたくさんのお手伝いがあるので、夜は疲れて宿題もできません。夜ご飯が終わると、シンベグイルはまっすぐに布団へ行くようになります。死んでしまったお母さんがくれたきれいな色の毛布だけが、シンベグイルをなぐさめてくれたのです。お父さんは、そんなシンベグイルの気持ちに気づいていないように感じました。

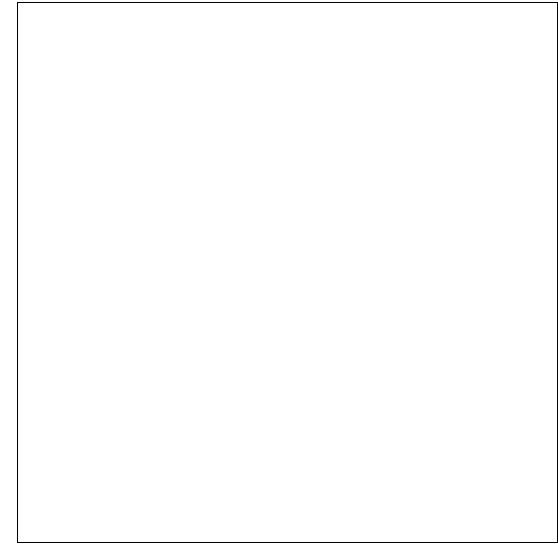


お父さんは毎日シンベグイルに会いに来ました。ある日、アニータと一緒にやってきて、シンベグイルの手を握ろうと手を差し出しました。「本当に、本当にごめんなさい。私が悪かったの」こう言って、アニータは泣いていました。「もう一度、一緒に暮らすためにがんばってみたい？」シンベグイルは心配そうなお父さんの顔を見上げてから、ゆっくりと一歩踏み出すと、アニータに抱きついたのです。





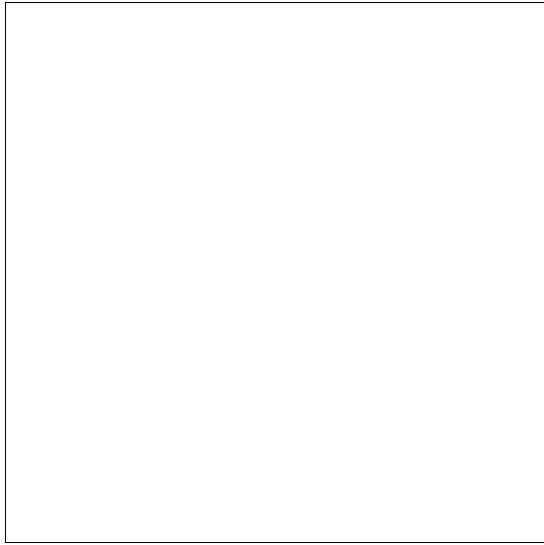
何か月かたって、お父さんはしばらく家を空けると言いました。「出張にいかなくちゃいけないけど、ふたりは一緒にがんばれるよね」シンベグイレの顔が曇ったことに、お父さんは気づきませんでした。アニータはだまっていました。アニータも嬉しくなかったのです。



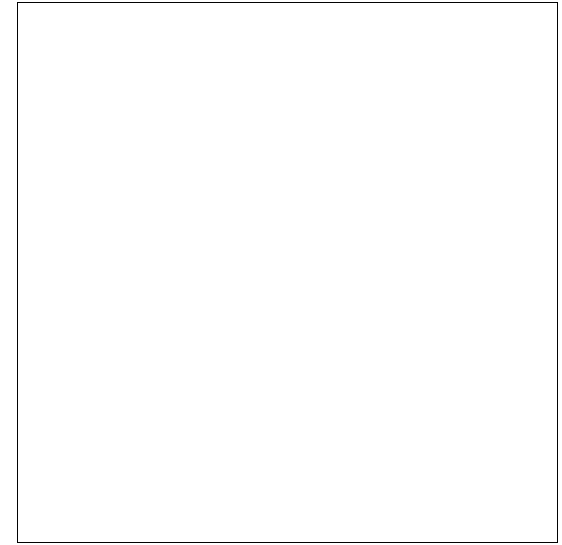
シンベグイレがいとこたちと遊んでいるときでした。遠くにお父さんの姿を見つけたシンベグイレは、お父さんが怒っているんじゃないかと怖くなって、おばさんの家の中に急いで隠れてしまいました。けれども、近くまでやってきたお父さんはこう言いました。「シンベグイレ、お母さんにぴったりな人を自分で探し出したんだね。シンベグイレのことが大好きで、しかもわかってくれる人だもんね。僕はそんなすごい娘がいてくれて幸せだし、父さんだってシンベグイレのことが大好きなんだよ」お父さんとはなして、シンベグイレは好きなだけおばさんの家にいられることになりました。

シンベグアイのお父さんが家に帰ると、シンベグアイ
しかいないことに気づきました。「アニータ、何が
あったんだ？」お父さんは暗い気持ちで聞きました
た。アニータはシンベグアイが逃げ出した時のこと
を話しました。「シンベグアイにみとめてもらいた
かったの。でもきつと、私かきつとあたりすぎたん
だわ・・・」お父さんは家を出ると、川のほうへ歩い
てから、お姉さんの住む村に向かいました。シンベ
グアイを見かけていないか、お姉さんに確かめると
めでした。

お父さんが出かけたあと、シンベグアイの毎日は前
よりもっとつらくなりました。お手伝いを全部しな
かったり、弱音をはいたりすると、アニータはシン
ベグアイをたたくのです。しかも、夜ご飯はアニー
タがほとんど食べてしまって、シンベグアイにはほ
んの少しの食べ残ししか回ってきません。毎晩シン
ベグアイは、お母さんの毛布を抱きしめて、泣きな
から寝るのです。

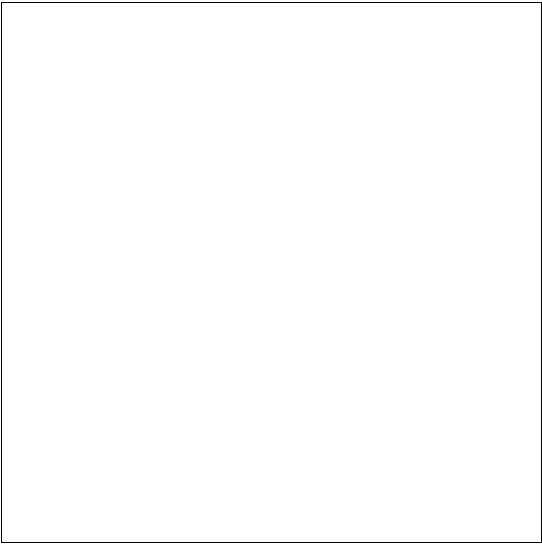


そんなある朝、シンベグイレは寝坊してしまいました。「なんて怠け者なの！」アニータは怒って、シンベグイレを布団から引きずり出しました。大切なお母さんの毛布にアニータの爪が引っかかって、毛布は真っ二つにちぎれてしまいました。

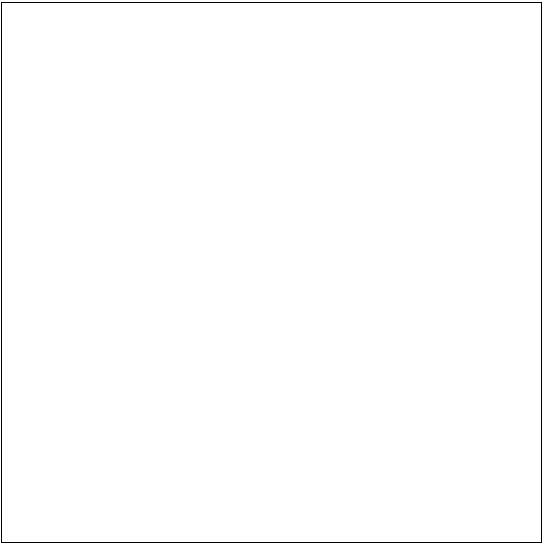


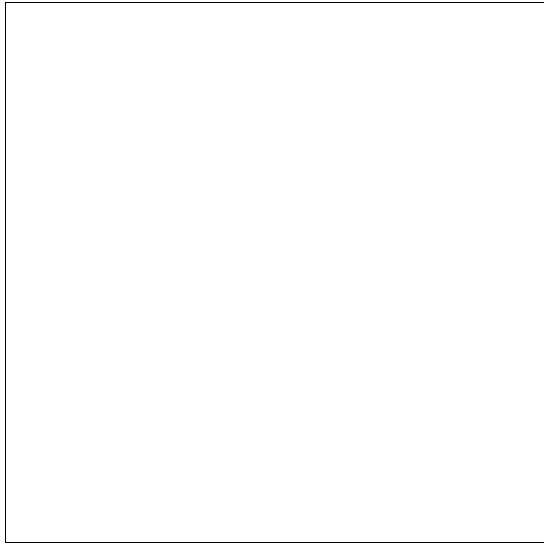
おばさんはシンベグイレを家に連れて帰ると、あたたかいご飯を出してくれたあと、お母さんの毛布をかけた布団にシンベグイレを寝かせてくれました。その夜寝るとき、シンベグイレは泣いてしまったのですが、でもそれはつらくて泣いたものではありません。安心したから泣いてしまったのでした。おばさんならちゃんと面倒をみってくれると、シンベグイレにはわかったのです。

その人は木を見上げて、女の子ときれいな色の毛布を見つけると、思わず声を上げました。「シンベグアイ！弟の子だわ！」ほかの女の人たちは洗濯をやめて、シンベグアイの木から下ろしてくれました。シンベグアイのおばさんは、小さなシンベグアイを抱きしめて、一生懸命になぐさめてくれました。

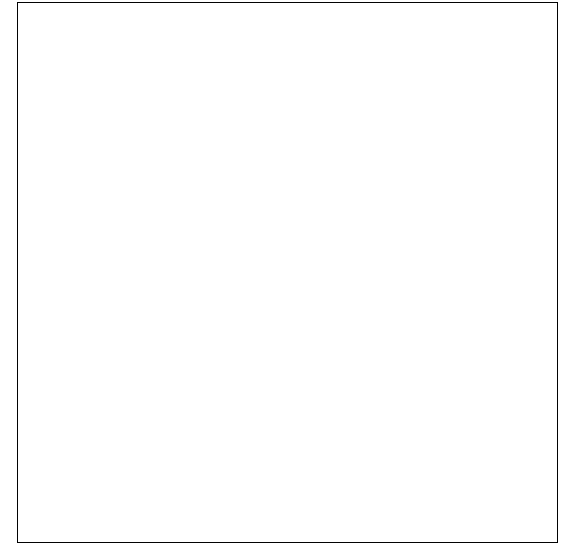


シンベグアイはもうびっくりして悲しくて、とうとう逃げ出すことにしましたのです。ちぎれた毛布と少しの食べ物をもって家を出ると、お父さんが通った道をたどっていききました。





夜になって、シンベグイレは川のほとりの高い木にのぼって、枝の間に寝床をつくりました。そして、寝るときにこんな歌をうたいました。おかあさーん
おかあさーんおかあさんがおいてった私をおいて
行っちゃったおとうさんは好きじゃないもう、私の
ことが好きじゃないおかあさんは、いつ帰る？おか
あさんがおいてった。



翌朝も、シンベグイレはまた同じ歌をうたいました。その歌は、川へ洗濯に来た女の人たちの耳にも入りましたが、高い木の上から聞こえてくるので、女の人たちは、これはきっと葉っぱが音を立てているのだろうと思って洗濯を続けていました。けれども、その歌をしっかりと聴いた人がひとりだけいました。